

オスマン朝の始祖オスマンと「オスマン集団」の性格

小山 皓一郎

はじめに

オスマン朝の始祖と目されるオスマンが、いかなる出自の人物であつたかという問題は、未だ解明されたとはいえない。今日我々がオスマンに関してもつ知識の大部分は、オスマンの死後に書かれたオスマン朝の年代記にもとづくものである。オスマンは自らの名をとどめる史料を全く残しておらず、またオスマンと同時代の外部の記録にもかれの名はほとんど現われていない。オスマンの在世中（一二五八—一三三六^①）アナトリアを支配していたルームセルジューク朝とイルハン朝の史料には、オスマンの名は一度も言及されていない。オスマンに関する同時代の記事は、わずかにビザンツ史料の中にのみ見出される。ビザンツ史家 Pachymeres が一三〇一年におこつたビザンツ帝国軍とオスマン軍の衝突（Baphaeon 戦）を記録しているのが、オスマンの名が史上に現われた最初である。^②しかし、ビザンツ史料はオスマンの名に断片的に言及するにすぎず、オスマンの正体を究明する手がかりとするに

は不十分である。したがってオスマンという歴史的人物の実体は、後世に書かれたオスマン朝年代記の記載を通じて推論していくほかはない。現存するオスマン朝年代記は最も古いものでも一五世紀初頭に書かれたもので、そこに現われた始祖オスマンの像は多分に美化され巨大化されている。しかし、少なくとも一六世紀以前に書かれた年代記は、素朴な叙述の中に後世の勅撰王朝史には認められない多くの真実を含むように思われる。なかでも一四七八年に完成したと推定される *Aşıkpaşazade Tarihî* (*Aşıkpaşazade* の年代記) は、ことオスマン朝の草創期に関しては最も信拠すべき史料と目されている。私はこの *Aşıkpaşazade Tarihî* を中心に種々の史料や研究を吟味しつつ、オスマン朝の始祖オスマンと「オスマン集団」の実体について考えてみたい。

一

年代記としての体裁と詳細な内容を兼備する最古のオスマン朝史料は、*Aşıkpaşazade Ahmed Aşıkî* (一三九三〜一四八一) の手になる '*Tevârih-i Âli-Osman*' (オスマン家の歴史) ('通称 '*Aşıkpaşazade Tarihî*' (以下この通称に従う) である。本書は一六一の章 (*bâb*) から成り、⁽⁴⁾ オスマンの祖父 *Suleyman Şah* から第七代スルタン *Mehmet* 二世 (一四五二〜一四八一在位) に至る歴代の事蹟を編年史的に叙述している。著者 *Aşıkpaşazade* は本書の自序によると、有名なアナトリアのチュルク詩人 *Aşık Paşa* (一二七二〜一三三三)⁽⁵⁾ の曾孫にあたり、一四八一年にコンスタンチノープルで没するまで八八年の生涯を「貧しいデルヴァーシヤ (*fakir dervîş*)」として、また同時にオスマン朝の征服活動に参加した歴戦の勇士として生きた。⁽⁶⁾ 本書の史料性格は後段で検討するとしてその

内容にはいると、ここではオスマンの父祖たちは明らかに「遊牧首長」として現われている。オスマンの祖父にあたる Suleyman Sah は「五万戸の遊牧チュルクメンとタタル (elli bin mîkdari göçer Türkman ve Tatar evi)」⁽⁷⁾を率いて東方からアナトリア東部に到来し、ユーフラテス川の上流を渡河する際に落馬して死んだ。この Suleyman Sah の移住物語は、Asikpasazade と同時代及びそれ以後のオスマン朝史家の大部分が伝えているが、Asikpasazade に半世紀先立つ Ahmedi はオスマンの先世を父 Ertugrul の代までしかさかのぼらず、また同時代の史家の中でも Enveri や Karamani は⁽⁸⁾、オスマンの祖父の代の名を Gündüz と記している。オスマンの祖父は、後述するようなオスマン家の素姓からみて、Suleyman Sah というアラブ＝ペルシア系統の名よりむしろ Gündüz というチュルク語名を有した可能性がよい。ここに現われた Suleyman Sah は強いて歴史上にそれらしい人物を求めれば、セルジューク朝のアナトリア遠征を指揮し、ルーム＝セルジューク朝の始祖となつたシュレイマン・イブン・ブシクトルミシュにあたるようである。おそらへこの Suleyman Sah は後世のオスマン朝史家の混乱した歴史知識の所産であるか、あるいはオスマン朝をセルジューク朝の後継者として格づけるために、シュレイマン・イブン・クトルミシュの追憶がオスマン家の父祖の系譜に仮託されたものであろう。

オスマンの先世の中で實在人物として確認できるのは、オスマンの父 Ertugrul の代からにすぎない。Ertugrul に関する同時代史料は未だ見出されないが、オスマンの子オルハンの發したワクフ寄進状にオルハンの祖父として Ertugrul の名が明記されていることなどからみて、この人物が實在したことは疑いない。しかし、年代記の伝える Ertugrul の生涯にはやはり伝説的色彩が濃い。Asikpasazade によると Ertugrul は Suleyman Sah の三人

の子の一人で、父の死後二人の兄弟が東方へ引返した後、かれだけが「四〇〇の天幕(dört yüz mîkdarî göçer ev)」(■)を率いてアナトリアを西方へ進み、ルームセルジューク朝のスルタン、アラリエッディーン・カイクバート一世(一二一九—一二三六在位)に対して「われらに幕营地を示せ。行こう。(ビザンツ領土を)襲撃しよう(Bize dahî yurt gösterün. Varalım, gazâ edelim)」(■)と要求した。スルタンは「かれらの到来を大いに喜」び、「Karaca Hisar ~ Bilecik の間に ~~for~~ Söğüd をかれらの幕营地(yurt)として示し、Domaniç Dağı ~ Ermeni Belii とをかれらに夏营地(yayla)として与え」た(■)。かくて Ertuğrul の率いる「四〇〇の天幕」は「かれらの土地に落着い(yerlerinde sakin oldılar)」て「夏营地で夏牧し冬营地で冬牧した(yaylakların yayladılar ve kışlakların dahî kışladılar)」(■)。この記事からはオスマンの父 Ertuğrul はビザンツに対する軍事活動に従事することを条件に、ルームセルジューク朝のスルタンから所領を与えられたように察せられる。この点で Asik-pasazade の叙述はやや曖昧であるが、オスマン朝年代記の大部分はもつと明確にスルタン、アラリエッディーン一世の対ビザンツ軍事活動に言及し、Ertuğrul がこのスルタンに従つて戦功を挙げたことにより、アナトリア西北隅の国境地域に所領を与えられたことを伝えている。しかし、ルームセルジューク朝の史料はアラリエッディーン一世と Ertuğrul との関係に全く言及せず、アラリエッディーン一世のビザンツに対する軍事活動は、ビザンツ、ルームセルジューク朝のいずれの側の史料にも記録されていない。⁽¹²⁾ アラリエッディーン一世は確かにこの王朝の中興の英主であつた。このスルタンの治世にルームセルジューク国家の領域は再びアナトリア全土に拡大されるかに見えた。しかし、アラリエッディーン一世の軍事活動は西方よりむしろ東部地域に向かつて展開され、かれの最

大の目標はルーム＝セルジューク朝の宿願とするアレップおよびシリアの獲得にあつた。一二〇四年コンスタンチノープルが第四次十字軍の立てたラテン帝国に占拠されて以来、ビザンツ帝国はアナトリア西北部のニケーア帝国と、黒海沿岸のトレビズンド帝国とに分かれて存続したが、アラ＝エッディーン一世はこれらアナトリアのビザンツ国家とは終始平和的な関係を維持していた⁽¹³⁾。したがつてオスマン朝年代記にアラ＝エッディーン一世がビザンツ領土の征服者として現われているのは史実に背馳する。

ところで *Asikpaşazade Tarihî* においては、前述のように *Ertuğrul* はアラ＝エッディーン一世に対し「行く、(ビザンツ領を) 襲撃しよう」(Ⅱ) と呼びかけているが、アラ＝エッディーン一世の対ビザンツ軍事活動は別に言及されておらず、*Ertuğrul* についても「*Ertuğrul Gazi* のときには戦争や合戦や殺戮はおこらなかった。かれらは夏营地で夏牧し冬营地で冬牧した。……」(Ⅲ) とある。また *Ertuğrul* の子オスマンについても「父の地位を継ぐと近隣の不信者たち (*komsu kâfirler*) と あわめて友好的な関係にはいづた (*gayet müdârâya başladî*)」(Ⅳ) とあり、さらに後段でもオスマンとビザンツ領の *Bilecik* との交渉についてこう述べている。「*Osman Gazi* は *Bilecik* の不信者たちに非常な敬意を示していた。人々は問うた。『あなたは何故 *Bilecik* の不信者たちを尊敬するのか。』かれは言つた。『かれらはわれらの隣人である。われらはこの地方へ他国者 (*garîb*) としてやつてきた。かれらはわれらを暖かく迎えてくれた。今われらがかれらを尊重するのはわれらの義務である』と」(Ⅹ)。かように *Asikpaşazade* は、*Ertuğrul* がルーム＝セルジューク朝のアラ＝エッディーン一世から所領を与えられたとする点では他のオスマン朝史家と一致するが、その動機とされる対ビザンツ軍事活動には言及せず、*Ertuğrul* が

ビザンツとの国境地域に平和的に移住して来たかのごとく伝えている点でほとんど唯一の例外をなしている。しかし、当時のアナトリア情勢を考慮に入れると、Asikapazade の所伝が最も事実に近いように思われる。前述のようにアラ・エッディーン一世時代のルーム・セルジューク朝は、アナトリア東部からさらにシリア方面への発展を志向し、他方ニケーア帝国は創設以来コンスタンチノープルをラテン帝国の手から奪回し、再びこの帝都を中心にビザンツ帝国を復興しようという目的を追求していた。かように前者の関心は東方へ、後者の関心は西方へ向かつていたから両者間に大きな利害の対立はなく、両者はむしろ東西の勢力均衡のためにお互いの存在を利用していた観さえある。こうした均衡関係はビザンツ国境地帯に既に一三世紀以来確立されていて、両国の国境地帯はどちらの中央権力からも隔離された特殊な環境を形成していた。おそらくErtuğrulはこうした状態にあつたルーム・セルジューク国家の西部国境にアナトリアの何処か別の地域から移住して来て、ニケーア帝国との国境地帯に住地を定めたのであろう。この間にアラ・エッディーン一世とErtuğrulとの間には何らかの交渉が存したかも知れないが、それは中央の記録にとどめられずにおわつている。

ここでErtuğrulという人物についてひとまず結論を出しておこう。Ertuğrulが「四〇〇の天幕」を率いてアナトリアを縦断し、アラ・エッディーン一世とともにビザンツ領土を襲撃した戦功によつて所領を与えられたという伝承は述作された疑いがつよい。だがErtuğrulの冬営地がSöğüdに、夏営地がErmeni Belü ve Domanıç Dağıにあつたこと、オスマンの父祖が父Ertuğrulの代にこの地方に到着したこと、これらに関してはほぼ全ての伝承が一致しており、上述のような状況から見ても事実とみなしてよいのではないか。Ertuğrulの正体は別の機会

にさらに追究することにして、本稿では上述の知識を踏まえて Ertuğrul の子オスマンに論を進めることにしたい。

二

Aşıkpaşazade によれば、Ertuğrul は Söğüd に到着した数年後にアラーのもとに召され、「Söğüd の人々は Osman Gazi がその父の後継ぎにふちわしうと見」た⁽¹⁴⁾。Aşıkpaşazade はオスマンの出生地を明らかにしてないが、Nesri はそれが Söğüd であることを明記している。Söğüd は現在 Bilecik 県の Söğüt 地区 (kaza) とその名をとどめており、北は Sipahidağ (海拔 1324 m)、南は Metris (1307 m)、東南は Bozdağ (1371 m) の山々で囲まれ、東南から西北方へ流れるサカリア川溪谷に面した起伏の多い傾斜地である。オスマンはこの幕营地 (yurt) Söğüd からその生涯の活動を開始する。父の後を継いだオスマンは、「遠く離れたところから狩猟をはじめた。夜となく昼となく出かけた。かれのもとに多数の男たちが寄り集まって集結した (Osman Gazi dahi Irak yerlerden av avlamağa başladı. Gah geceyle ve gah gündüz varmağıle. Kendünün yanına hayli adamlar cem olub deridiler)」⁽¹⁵⁾。これに対応する記載を Nesri Tarihî に求めると、「Ertuğrul の子らのうちオスマンが勇者 (bahadır) となった。そのゆえに人々はオスマンを尊敬して、狩猟のときはチュルクの若者 (yigüd) は大勢かれのもとに集まつた⁽¹⁶⁾」。叙述が簡略なため明確にはとらえにくい⁽¹⁷⁾が、これらの記事はオスマンが実力によつて父 Ertuğrul の「遊牧首長」としての地位を継承したことを物語るようである。Nesri の所伝に見える「勇者 (Bahadır)」とか「若者 (yigüd)」とかいう語は、それ自体遊牧的勇士に対する呼称ともなっている⁽¹⁸⁾。かように Aşık-

paşazade はオスマンをまです一人の「遊牧首長」として登場させる。そこで Asikpaşazade Tarihî に現われた遊牧的要素を示唆する記事を年代順に抽出してみると、

(a) Inegöl のテクフルはオスマンに敵意を抱き、オスマンが「夏営地や冬営地に行くときに移動するのを妨害した。オスマンは Bilecik のテクフルに「われらが夏営地に行くときは、われらの荷物を貴下のもとに預かつてほしい」と頼んだ。かくてオスマンが「夏営地に行くときは、いつも全ての荷を牡牛に積み幾人かの女たちをつけて運んで (Bilecik) 域に預けた。夏営地からもどるときは、チーズ (peynir)、絨緞 (halı)、キリム織 (kilim)、小羊を土産にして預けたものを引取りに行つた」(III)。

(b) Harmankaya のテクフル Köse Mihal の娘の婚礼にオスマンは「よい絨緞と一群の牡羊をもつてやつて来た。Osman Gazi の贈物は太いに喜ばれた」(XI)。

(c) オスマンは Bilecik のテクフルの婚礼に出席できぬ理由として「今はわれらは夏営地に移動しなければならぬ」と伝言させ、代理に母と妻とを出席させるにあたり「われらの女たちは広い草原 (Sahra) に馴れている。Bilecik は狭い土地である。婚礼はそこではなく Çakır Binar で」(つぼし)と要請した(XII)。

(d) 「(オスマンの子) オルハンはすでに若者 (yigird) となつていた。もう一人の息子がいたがオスマンはこれを遊牧に従事せしめていた (……Anı göğ üzerinde koyub durur idi)」(XIII)。

(e) オスマンが死んだとき、かれの遺産としては「この征服された土地だけがあつた。銀貨 (akça) や金貨 (altun) は全然なかつた。Osman Gazi のまた新しい長上衣 (sırtak tekele) があつた。馬具 (yancuk) があつた。塩樽

(duzluk) と匙入れ箱 (kasukluk) があつた。一對の乗馬用長靴 (bir sokman edük) があつた。数頭の良馬があつた。幾群れかの羊があつた。今日ブルサ (Bursa) の郊外にいる『ペイの羊 (beglik koyun)』はこの羊群の子孫である。Sultan Öni には幾群れかの牝馬がいた。また幾つかの馬の腹帯 (depüngü) が見出された。そのほかには何も見られなかつた。何も残つていなかった」(XXIX)。

(f) オスマンの死後、二人の遺子オルハンと Alaaddin が将来の方針を相談したとき、弟の alaaddin は言つた。「この国はあなたのものである。こゝで遊牧 (göbanlık) を営み、この国を統治し繁栄させるためには王者 (padışah) が必要である。さらに種々の備え (cehab) が必要である。備えとはつまりこれらの馬であり、また王者の祝宴 (şölen) のためにはなくてはならぬ羊である。今われらが分割して相続すべき何があろうか」(XXX)。

オスマンの生涯における遊牧的な活動を示唆する記載はほぼ以上に尽きるが、これらの叙述を総合すると次のように言えそうである。すなわち、オスマンの統率した集団はビザンツとの国境地帯で遊牧を営み、その遊牧生産物はおそらく近隣のビザンツ領住民との交易にあてられていた (a, b)。しかし、その集団は İnegöl のテクフルに牧地間の季節移動を妨害されたこと (a)、後述することく İnegöl に対するオスマンの最初の襲撃が「七〇人 (yetmiş kişi)」の兵力をもつてなされたこと (III) などから見て比較的小きかつたと思われる。Asikpaşazade Tarihî では第一章から第三章まで遊牧活動を示唆する記事は跡を絶ち、ビザンツ領土に対する相次ぐ襲撃の叙述でみたまはれている。しかし、第一章にオスマンがその二子オルハンと Alaaddin のうち年少の Alaaddin を遊牧に従事せしめていた^(b)とあることから見て、オスマンとオルハンとが征服活動に専念しているあいだ、後方の

牧地では Aladdin の指揮下に遊牧が続けられていたことが想像される。オスマンの残した遺産の品目⑥は、オスマンが一人の「遊牧首長」として死んだことを示唆するようであり、オスマンの死に際しての遺子たちの対話⑦は、オスマン一族がオスマンの死後も依然として遊牧を営み、オルハンが「遊牧首長」としての地位を継承したことをうかがわせる。要するに、これらの記事から浮かんでくるのは、アナトリア西北隅の高原に遊牧する小遊牧集団の統率者としてのオスマンの像である。しかし、この遊牧集団がいかなる構造をもち、オスマンと集団構成員との間にいかなる関係が存したかは、これらの記事だけでは把握難い。そこで次にオスマンの部族的出自を検討してみよう。

オスマンの先世のうち実在性が確認されるのは、前述のとおりオスマンの父 Ertuğrul からさきまで。しかし、オスマン朝年代記はその巻頭にオスマンの父祖の長い系図を掲げるのを通例とす。Asikpaşazade Tarîhi の第一章には次のような系図が提示されている。

1 Nuh, 2 Yâtes, 3 Maçin, 4 Çin, 5 Durmuş, 6 Yantemür, 7 Karluğa, 8 Karahul, 9 Süleyman Şah, 10 Karalu Oğlan, 11 Amudi, 12 Karaca, 13 Kurtulmuş, 14 Çar Buğa, 15 Sevünc, 16 Baybus, 17 Baş Buğa, 18 Yamaç, 19 Kızıl Buğa, 20 Kamari, 21 Baysub, 22 Kara Han, 23 Tuzak, 24 Ay Kutluk, 25 Kara Han, 26 Oğuz, 27 Gök Alp, 28 Basuk, 29 Tok Temür, 30 Suğar, 31 Bakı, 32 Sankur, 33 Kaytun, 34 Toğar, 35 Aykuluk, 36 Bayintur, 37 Kızıl Buğa, 38 Kara Alp, 39 Süleyman Şah, 40 Ertuğrul, 41 Osman.

各年代記に見える系図はこれと細部まで一致するとはいえないが基本的な構造は同じである。たとえ Asik-

paşazade にやや先立つ Sükrullah の年代記に見える系図は、1 Nuh, 2 Yâfes, 3 Kayı Han, 4 Kara Han, 5 Oğuz, 6 Gök Alp, ……42 Kızıl Buğ, 43 Kaya Alp, 44 Süleyman Şah, 45 Ertuğrul, 46 Osman ⁽²¹⁾ である。

いずれの年代記中の系図にも必ず見出される人名に「Oğuz」がある。この「Oğuz」はラシードゥッディーンの「集史」第一巻「部族篇」にチュルクメンの族祖として現われる「Oğuz」と同一人物と見て間違いない。「集史」の編纂された一四世紀初頭までに、チュルクメン諸部族のあいだには「Oğuz」という人物を主人公とするいわゆる「オグズ伝説」が成立していた。⁽²⁰⁾ オスマン朝年代記に現われた父祖系図は、明らかに「オグズ伝説」にもとづくもので、オスマン王朝がチュルクメンの偉大な族祖「Oğuz」の系譜を引くことを誇示したものと思われる。⁽²¹⁾ オスマン朝のチュルクメン出自は、アナトリアへ移住したチュルクの大部分がチュルクメン族であつたことからみて自然であり、⁽²²⁾ オスマン朝外部の史料によつても裏書きされている。たとえば一三三二—一三三三年にアナトリアを旅行したイブン・バットウータは、オスマンの子オルハンについて「イフィティヤールッディーンウルハン」はトルコ、マイン族の君主中、もつとも富強で……⁽²³⁾と記している。しかし、「チュルクメン」というのは当時西アジアの諸地域に住したチュルクの大集団に対する大きな部族呼称であり、「集史」の「部族篇」によれば⁽²⁴⁾チュルクメンは二四の部族に分かれ、この二四部族のあいだには左右両翼から成る整然たる序列が確立されていた。この部族序列において二四部族の筆頭に位置したのは「Kayı」部であつた。Kayıは歴史的に見るとむしろ目立たぬ部族であるが、一一世紀に書かれたカーシユガリーの「ディーワーンルルガトウツ・チュルク(トルコ語綜覧)」でもチュルクメンを構成する二三部族の中でセルジューク朝の属した「Kınık」部の次に挙げられており、⁽²⁵⁾ Kayıがチュルクメン部族組織の

中で何か本源的な優越性を有したことが想像される。

ところでオスマン朝年代記のうち Ahmedî, Aşîkpaşazade, Nesrî など著述年代の古いものは、オスマンのチュルクメン出自に言及してもそのいずれの部族に属したかは明らかにしていない。ただ例外として Murad 二世（一四二一—一四五一在位）のときに書かれた Yazıcıoğlu Ali の ‘Selcukname’（セルジュク朝史）⁽²⁶⁾ は、オスマンが上述の Kayı に属したことを明記しており、さらに注目すべきは一六世紀以降に書かれた多くの勅撰のオスマン王朝史は、ほぼ例外なくオスマン家の Kayı 出自に言及し、チュルクメン諸部族のあいだでの Kayı 部の貴種性を強調している。⁽²⁷⁾ そのためオスマン家の Kayı につながる系譜は、「集史」などを通じてチュルクメンの部族序列を觀念的に理解した後世のオスマン朝宮廷史家が、オスマン家の家格を高めるために捏造したのではないかと疑う向きもある。⁽²⁸⁾ 上述の Yazıcıoğlu Ali はかような宮廷史家の一人であり、かれが「集史」を引用していることはほぼ疑いない。⁽²⁹⁾ しかし、オスマン朝の Kayı 出自は一つの有力な証拠資料、すなわちオスマンの子オルハンの代に鑄造された銀貨（akça）に Kayı の ‘danga’（部族標識）が刻印されていることからほぼ確実とみられている。⁽³⁰⁾ 私はこれに疑問を呈するだけの材料を持合わせていないので、本稿ではこのオスマン Kayı 出自説に従いたいと思う。ところでオスマンが Kayı から出たとして、かれが活動を開始した一三世紀後半の時点で Kayı は部族としていかなる状態にあつたであろうか。

F. Köprülü によれば一般に中世のムスリム史家は、カーシュガリー⁽³¹⁾やラシードウッディーンをわずかな例外として、チュルク遊牧諸部族の部族組織に対し立入った関心を示していない。ムスリム史料には「チュルクメン」という呼称は頻見するが、チュルクメンを構成する諸部族の名が言及されることはまれである。特に Kayi に関しては、その部族としての動きを史料中にとづけることは不可能に近い。しかし、現在のアナトリアにはチュルクメン諸部族の名をとどめる多数の地名が残っており、Kayi 部族も Kayhan, Kayikoy, Kayicilar, Kayili などという地名のなかにその名残りをとどめている。こうした「Kayi 地名」は今日アナトリア全域に分布しているほかアゼルバイジャン地方にも見出だされるが、アゼルバイジャン以東の地域には見当たらない。アナトリア内部でも「Kayi 地名」は中央から西部にかけて多く見出だされる。また一二一六世紀のあいだにアナトリアで活動したチュルクメン諸部族——それらの動きは断片的ではあるが史料に記録されている——のなかに Kayi の名は全く見当たらない。かような事実から Köprülü は、Kayi の部族は一一世紀に開始されたセルジューク朝のアナトリア征服に附随して部族全体がアナトリアに到来し、アナトリアの内部を西進して各地に分散し、チュルクメン諸部族のなかでは比較的古く遊牧形態から離れて定住化した、という推論をなした。

Köprülü の地名学的考察は、アナトリアの現在の地名を資料とする点に問題があると思われたが、かれの方法をうけついで F. Demirtaş は一六世紀中のオスマン朝治下アナトリアの土地台帳や徴税簿をしらべ、当時のアナトリアに今日の数倍にのぼる「Kayi 地名」が存在しただけでなく、Kayi の名をもつ遊牧組織も存続していたことを明らかにした⁽³²⁾。Kayi の遊牧組織はアナトリア西南部の Menteşe 地方に最も多く見出され、この地域での Kayi 部

族の定住化が他地区より遅れていたことを推測させる。Demirtas の調査によれば、Menteşe 地方の Kayı 遊牧組織はオスマン朝の文書のなかで ‘cemaat’ (Ar. jama‘at) と総称されている。この ‘cemaat’ という語はオスマン朝の行政用語で「独立の一遊牧集団 (aşiret)」を示しており、したがって「Kayı が文書のなかで一つの ‘cemaat’ として言及されていることは、かれらが行政上いかなる部族 (boy) や統一体 (birlik) にも含まれない独立の一遊牧集団 (aşiret) であることを示している」⁽³⁸⁾。つまり Menteşe 地方には一六世紀にもまだかような独立の遊牧組織が ‘cemaat’ と呼ばれる形で存在したのである。とくにこの Kayı の ‘cemaat’ は Menteşe 地方の諸地区に分散して生活しており、その各分枝は文書中 ‘tr’ と称されている。‘tr’ とはペルシア語で「矢」の意味でトルコ語の ‘ok’ に当たる。‘ok’ という語はチュルク史上古くから政治的・軍事的区分を表わしているが、⁽³⁹⁾ この ‘tr’ もおそらく政治的単位で各 ‘tr’ の冠する人名はその統率者の名であつたと思われる。Demirtas によれば ‘tr’ の長はオスマン朝の行政用語で ‘kethudâ’ (Pers. kat-khudâ) と呼ばれるが、⁽⁴⁰⁾ ことに ‘kethudâ’ とは「部族長 (boy begi) の行政官 (idari memurları)」という意味で、かれらは「いつとは知れぬ或る時期に、誰とも知れぬ部族長 (boy begi) によつて任命された」⁽⁴¹⁾ と考えられる。とすると、オスマン朝の行政用語で ‘cemaat’ という ‘tr’ というのは、もともとチュルク部族組織における「部族 (boy)」と「氏族 (oymak)」とに対応するもので、Menteşe 地方の Kayı 遊牧民は多数の氏族から成る部族組織を維持していたのかもしれない。Menteşe 地方が一六世紀に至るまで存続しえたとしたら、それはこの地域が比較的遠隔の地で部族組織の解体を促がす變動にさらされる機会が少なかったためであろう。

Demitasの調査によるとオスマン朝のおこったアナトリア西北部では、Kayıの遊牧組織は一六世紀にはすでに崩壊していたようである。⁽³⁶⁾しかしオスマンが出現した一二世紀後半ころには、前述のような情況から推してKayıの部族組織は存続していた可能性がつよい。そしてその部族組織が上述のようなMenteşe地方のKayı部族組織と比較しうるものであったとしたら、オスマンの率いた遊牧集団はアナトリア西北部に分布したKayıの部族組織を構成する一氏族(*oymak*)であつたかもしれない。つまりこの地域にはオスマンの率いる集団のほかにもKayıに属する氏族的集団が存在したのではないかと思われる。かような推測は年代記の記載によつて或る程度裏づけられそうである。Asikpaşazadeによると、オスマンがビザンツ領土に対する征服活動を開始したのも、Samsa Çavuşという人物が自己に属する兵力を率いてオスマンと行動を共にした。このSamsa ÇavuşについてAsikpaşazadeはこう述べている。「かれもまた多数の集団を率いる人である(Bir kişidir kim anun dahî hayli cemâati var)」。かれには共に働くSülemişという兄弟がある。Ertuğrul GaziがSöğütに來たとき、かれらもかれと共に來てMudurnu地方に居を定めた。かれらは不信者たちと仲良く生活していた。そのためOsman Gaziはその地方をかれらに委ねた」(X)。つまりSamsa Çavuşの率いた集団は、オスマンの父Ertuğrulとともにビザンツとの国境地域に到來し、Ertuğrulの本拠Söğütから遠からぬMudurnu地区に定着した、というのである。Samsa Çavuşはオスマンを「わがハン(Hanum)」と呼び、オスマンがDarakei Yenicesi方面に遠征したとき、その途中にあるサカリア川の岸で「準備して待つていた」(X)。またオスマンの子オルハンの指揮にも従つてKara Tegin城の守備を命ぜられてゐる(XXII)。こう見てくるとSamsa Çavuşはアナトリア西北部に存在したKayıの部族

組織を構成する一氏族の長で、同じく Kayi の一氏族長であつたオスマンの指揮に服したのではないか。つまりオスマンは父 Ertuğrul より Kayi の一氏族の長としての地位を継承し、さらにこの地域の Kayi 諸氏族の統率者の地位についたことが想像される。ビザンツ領土に対する最初の軍事活動となつた Inegöl 襲撃は「七〇人 (yetmiş kişi)」の兵力をもつてなされたが、これはオスマン直属の一氏族の戦力に相当するものであつたかもしれない。しかしこのあとの段階でオスマンは、Kayi の部族組織の統率者として Kayi の諸氏族を指揮し、統一された戦力をもつてビザンツに対する征服活動に乗出したように思われる。オスマン及びオスマンを中心とする集団の構造について以上のように考えてみたが、問題はまだ残されている。オスマンの統率下に自己直属の集団を率いる Samsa Cavus のような存在は年代記中ほかには見当たらず、オスマンを中心とする集団の部族的構造を示唆する記事はむしろ乏しい。それではオスマンの統率下にビザンツに対する征服活動に従事した人々は、年代記中どのような集団として現われているだろうか。

Asîkpaşazade Tarihî をはじめオスマン朝年代記の大部分において、オスマンとその父祖たちは程度の差はあれ「遊牧首長」的側面を付与されている。ほとんど唯一の例外は現存する最古のオスマン朝年代記、Ahmedi の *Dâstân-ı Tevârih-i Mülûk-i Âl-i Osmân* (オスマン朝歴代君主の史詩) である。Ahmedi はオスマン朝の歴史をオスマンの父 Ertuğrul の代から語りおこす。Ertuğrul はルームセルジューク朝のアラエッディーン一世の対ビザンツ軍事活動に参加して「Konya から Sultan Öyüğü へ来」て、そこから「不信者の地を攻め」た。折しも「Tatar⁽³⁵⁾ が誓約 (ahd) を破つて再び敵となつた」ため、アラエッディーン一世は「不信者を撃退させようとしその

方面（ビザンツとの国境地帯）を Ertuğrul に委ねて、自らは Konya に引返した。かくて Ertuğrul は「進軍して Söğüt 地区へやつてきた。剣をもつてその地方を取つた。それからしばし経たのち、この世界はかれから顔をそむけ」た。⁽⁸⁸⁾

アラエニッディーン一世のビザンツ領土遠征が史実に反することは既述のとおりであるが、Ahmedi が Ertuğrul を「遊牧首長」としてではなく、ビザンツの不信者と戦うイスラム軍の指揮者として描いていることは注目に値する。Ertuğrul につづくオスマンの一代は次のように語られている。⁽⁸⁹⁾

Ertuğrul はこの世から惜しまれつつ去り、息子のオスマンがあとをついだ。オスマンは偉大な ‘gazi’ (ulu gazi) となつた。何処へ行くとも道を拓き、あらゆる方角へ軍 (ceci) をさしむけ事をおこした。不信者たちを殺し、Bilecik とかの名高き İnegöl と、ちやうど Köprhisar を占領した。とどまることなくあらゆる方角へ軍 (leşker) をおこつた。わずかのあいだに多くの地方を奪つた。不信者を殺し、焼き払つて、かの有名なブルサとニケーア（チュルク語名 İznik）を包囲した。神の定めにより、これらの城市を陥落させるまゝに天に召された。

きわめて簡略な叙述であるが、これがオスマンの生涯を伝える最も古い記録である。Ahmedi はオスマンの率いた集団を単に「軍」と称して ‘Ceri’ あるいは ‘leşker’ (Ar. leshker) と記しているが、これらの称呼で表わされた集団の实体は把握し難い。ただここで注目されるのは「オスマンは偉大な ‘gazi’ となつた (Oldi Osman bir ulu gazi kim ol) とする一句である。‘gazi’ とは何であらうか。Encyclopaedia of Islam に引く ‘gazi’ すなわち

アラビア語の 'ghāzī' は異教徒との闘争、特に襲撃 (razzia) の形をとる軍事活動 'gaza' すなわちアラビア語の 'ghazwa' への参加者を指し、ムスリム戦士に与えられる名誉の称号ともなっている。⁽⁴⁹⁾ Ahmedi がオスマンを「偉大な gazi」と称したのは、ビザンツ領土に対する襲撃 'gaza' を指揮した偉大なムスリム戦士という意味からであろう。つまり Ahmedi の年代記においては、オスマンは「遊牧首長」というよりむしろ「偉大な gazi」として現われている。

ところで 'gazi' という語は Asikpasazade Tarhi にも見出される。ここではオスマンの名がつねに 'Osman Gazi' と記される一方、オスマンに附随する人々はいしばしは「gazi たち」(gaziler = gazi + トルコ語複数語尾 -ler) と称され、「gazi たち」(gaziler) という語はこの年代記中最も頻出する単語の一つとなっている。「gazi たち」という語がはじめて現われるのは第三章の次のくだりにおいてである。

或る日 Osman Gazi は Inegöl を夜中に焼討ちしようと七〇人を率いて Ermeni Beli を通つてやつてきた。(中略)「gazi たち」は神に身を委ねて真直ぐ待伏せする敵軍に向かって進撃した。全員徒歩であった。不信者たちは多勢であった。激しい戦闘になった。Osman Gazi の兄弟 Sari Yati の子 Bay Hoca が戦死した(III)。

この Inegöl に対する夜襲はオスマンがビザンツ領土に対してしかけた最初の軍事活動であるが、Asikpasazade はこのときの戦闘について「この gaza は Osman Gazi によつてヘジラ暦の六八五年になされた」と述べている。つまり Asikpasazade は異教徒に対する襲撃を 'gaza' と呼び、これに参加する戦闘員を 'gazi' と称して、これら

の語をその語義通りに用いている。上掲の記事につづく諸章において「gazi たち」という語は頻繁に現われ、あたかも「gazi 集団」とでも称すべき集団が存在したかの印象をうける。そこで以下においては *Aşıkpaşazade Tarîhi* の第三―第三章、つまりオスマン一代に現われた「gazi たち」について、それを一つのまとまりを持つ集団組織と前提し、その構造と機能とを見ていきたい。

四

オスマンがはじめてビザンツ領土を襲撃したとき、かれに従う「gazi たち」は「七〇人」の集団であつた。この第一次 *İnegöl* 攻撃は失敗におわり、「Osman Gazi の兄弟 *Sarı Yarı* の子 *Bay Hoca*」が戦死した。オスマンには *Gündüz*, *Sarı Yarı* という二人の兄弟と、三人の甥たち *Bay Hoca*, *Ay Doğdı*, *Ak Temür* があつた。*Bay Hoca* はついで *Sarı Yarı* が第二次 *İnegöl* 襲撃のとき戦死し、やがてついで *Koyun Hisar* (ギリシア語名 *Baphaeon*) におけるビザンツ帝国軍との会戦では、*Gündüz* の子 *Ay Doğdı* が戦死してゐる。*Gündüz* はオスマンによつて「*Su başı*」(軍司令官)に任命されており、*Ak Temür* はオスマンがブルサ包囲のために築いた要塞の一つを守備している。かようにオスマンの兄弟や甥たちは、ビザンツに対する軍事活動において重要な役割を果たしたようである。*Bay Hoca* と *Sarı Yarı* はそれぞれ第一次、第二次 *İnegöl* 攻撃において、つまりオスマンが軍事活動を開始した最初の段階で戦死しており、このことから第一次 *İnegöl* 攻撃に参加した「七〇人」の「gazi たち」は、オスマンの一族子弟を中核とする集団、前章で見たところに従えばオスマン一族を中心とする小遊牧集団

ではなかつたかと考えられる。この Inegöl 攻撃から八年後、一二九二年ころオスマンが Darakot Yenicesi 方面に遠征したとき、Samsa Çavuş の率いる一集団がサカリア川の岸で「準備して待つてゐた」(X)。この Samsa Çavuş の集団もまた「gazi たち」と称されているが、前述のごとくこの集団はオスマンの率いた集団と同じく Kaya に属する小遊牧集団であつた公算が大きい。こう見てくると、「gazi たち」の中核をなしたのはオスマンを長とする遊牧集団で、その後 Samsa Çavuş のような人物に率いられる他の遊牧集団の附随したことが考えられる。すると、オスマンを中心とする「gazi たち」とは、結局これらの遊牧集団の連合したものであろうか。

「gazi たち」は多く馬上にある。「gazi たちは馬に銅葉を与えて乗馬した」(X)、「gazi たちは数日馬を休ませた」(XVI)、「gazi たちは夜も眠らず、昼も馬の背より下り……」(XXII)、「gazi たちはつゞも馬の背より下りなかつた」(XXV) 等々、「gazi たち」と馬との関係は密接である。第一回の Inegöl 襲撃のときは「全員徒歩であつた (Cemi 'isi yayagidi)」(III) とあるが、これはおそらくこの時の戦闘が Ermeni Beli 山道を越えての奇襲であつたために「徒歩 (yayak)」であることを特に記したのであろう。つまり「gazi たち」にとつては馬上で戦うのが常態であつたようである。しかし、このことから直ちに「gazi たち」の全てが遊牧集団を構成する遊牧民であつたとは言いきれない。むしろ、年代記に現われたところから何らかの遊牧集団として抽出できたのはオスマンと Samsa Çavuş の率いる集団だけであつた。Asikpaşazade はオスマンの統率下にビザンツとの軍事活動に参加した人々を、一からげに「gazi たち」と称しているが、この「gazi たち」はオスマンの征服活動の拡大につれて、最初の「七〇人」の集団から急速に増大したことが予想される。しかし Asikpaşazade は Samsa Çavuş

の場合を除き、外部からの新たな附随者の出身を明らかにしていない。かれらはオスマンの統率下に入るまえ、どこで何をしていたのだろうか。

İnegöl に対する二度目の襲撃に際しオスマンは「gazi たちを集めた(gazileri cem'etdi)」(V)。オスマンが Darakci Yenicesi 方面を攻略せんとしたとき部下の一人は言った。「わがハンよ。サカリア川を渡ることができるように、Sarı Kaya, Beş Daş をへつ Sorkun に進みましょう。そうすれば gazi たちはその方面からわれらのもとへやつて来るでしょう」(X)。オスマンが Yenisehir の周辺を征服してしばらく戦闘を休止したとき、「gazi たちは(オスマンが)あらゆる方向へ進撃し、勝利したのを見てやつてきてオスマンに言った。『われらのハンよ。神の加護によつて不信者たちは敗退し、ムスリムは勝利した。なんじのごとき強いハンをわれらが持てばこそである。もはやとどまることは許されな』と」(XX)。

「gazi たち」がオスマンに附随する経緯を多少とも示唆する記事はほぼ以上に尽きているが、このわずかな叙述から想像されるのは、「gazi たち」は、より正確には「gazi たち」の予備軍は、ビザンツとの国境地帯に蔓延して、ビザンツに対する軍事活動を指揮する有力な指導者が現われると随次これに附随する態勢にあつたのではないかということである。さらに憶測を加えればオスマンを中心とする「gazi たち」の集団は、ビザンツ領土に対する襲撃の度ごとに組織されたとも考えられる。それではこうした「gazi たち」はいかなる目的をもつてオスマンの麾下に参じたのであろうか。

「gazi たち」はもとよりムスリムである。「gazi たちは神に身を委ねた」(III)、「gazi たちは神の加護により川

を渡ることができよう」(X)、「gazi たちよ、信仰のためになんじらがいかに働くかを見よう」(XXII) 等々、「gazi たち」の軍事活動は信仰のための戦いとして正当化されている。しかし「gazi たち」の信仰戦士的人格は全体としてあまり顕著ではなく、むしろもつと現実的な側面が浮かび上ってくる。オスマンは「gazi たちを満足させた。町の家々を gazi たちやその他の者に与えた」(VI)、「身近かの gazi たちに家を作つて与えた」(XVI)、「gazi たちは喜んだ。オスマンは (gazi たちの) すべてに村を与えた。土地を与えた。すべてに分に応じた敬意を払つた」(XIX)、「Orhan Gazi はブルサのテクフルの財物を gazi たちに『恵与』(pahs) として与えた。莫大な財物があつた。そのすべてを与えた。gazi たちは大いに富んだ」(XXIII) 等々、ビザンツとの戦闘に参加した「gazi たち」は、オスマン（またはその子オルハン）から、ほとんどいつも報酬を与えられている。「gazi たちは略奪の許可を聞くや『おう』といつて城中に突入した」(XII) というように、前もつて戦利品の分配が約束される場合さえある。また「Osman Gazi に従う gazi たちは強化された。かれらはいつも 'gaza' を欲した」(XIX) とか「gazi たちは (オスマンが) あらゆる方向へ進撃し、勝利したのを見てやつてきてオスマンに言つた。『……もはやとどまることは許されない』と」(XX) とかいつた記事から見ると、「gazi たち」はビザンツ領土への襲撃すなわち「gaza」を積極的に希望し、ときにはオスマンに向かつて「gaza」の決行を要求することさえあつたようである。オスマンと「gazi たち」とは一体いかなる関係にあつたのであろうか。

Asikpasazade は「オスマン家の人々」には戦時や午後の礼拝 (ikindi) のとき「軍楽 (nûbet)」を奏する慣習があつたといひ、その意義についてこう説いている。

(この慣習には)二つの特別の意義がある。一つはかれらが「gazi」であることである。軍楽が奏されるのは「gaza」の布告である。「gaza」の用意をせよという意味である。かれらは「アラ」の御心によりわれらは「gaza」に出でたたん」と言つて起立する。もう一つは、かれらは食客(Cirag)を擁し、食卓(sofra)と旗印(alem)を有している。かれらは世の人々に食物を給する富の持主である。……(VIII)。

上述の第一の意義は「gaziたち」の信仰戦士的な側面を示すものであらうが、第二の意義において「オスマン家の人々」が「食客を擁」し、そのための「食卓」を用意して「世の人々に食物を給する富の持主であつた」というのは見逃せぬ記事である。前述のようにオスマンはビザンツ領土を占領すると、「gaziたち」に「町の家々を与え、家を作つて与え、村を与え、土地を与え、財物を与え、」「gaziたちを大いに富ませ、」「gaziたちを満足させ」ている。一方「gaziたち」は「常に「gaza」を欲し、ときにはオスマンに向かつて「もはやとどまることは許されない」と言う。「オスマン家の人々は食客を擁し」とあるその「食客」とは他ならぬこの「gaziたち」のことではなからうか。換言すれば「gaziたち」はオスマンの指揮するビザンツ征服活動に参加して戦利品の分け前を得ることを、かれらの主たる生活手段としていたのではないかと思われる。ところで「gazi」という語は一つの歴史的名辞である。「gaziたち」という称呼がイスリムの歴史においてどのような集団に対して用いられたかを見てみよう。

F. Köprülüによれば、「gaziたち」という語はイスリム史料のなかで「不信者を攻撃するイスリム戦士」という本来の語義よりもつと狭義に、より特殊な意味に用いられる場合が多い。すなわち「gaziたち」とは、「土地や定

戦を持たず、経済的な危機に際して、生活の手段を中世における恒常的な戦争や内乱に求める寄生階級⁽⁴¹⁾を指している。かれらは中央の大都市にあつては無頼の徒となり、辺境地帯においては国境の彼方の異教徒に対する一種の戦闘組織を形成する。こういう社会集団は早くも八世紀末のバグダードに‘Ayyar’の名で現われ、ターヒル朝やサッファリー朝治下のイラン、サーマーン朝時代のマールワランナフルでは‘gazi たち’(guzzāt)の名で言及されている。モンゴル侵入前後のマールワランナフルからアナトリアにいたる諸地域では‘harāfiṣa, ayyārān, sattārān, mutatawī’a, cu’aydiya, zanāṭira, fiṣyan, futuvcēdārān, runūd などの名で現われており、これらの名をもつ諸集団の間には多少の差違は存したと見られるが、いずれも‘gazi たち’の範疇に含め得るものであつた。⁽⁴²⁾かように Köprülü は‘gazi たち’をもつて、イスラム世界の辺境や大都市に恒常的に存在した社会集団、あるいは一種の寄生的階級と考えている。この Köprülü の所説を敷衍し、特に辺境における‘gazi たち’のあり方に注目して、オスマンの統率した集団を辺境の‘gazi’組織の一つとして扱えたのが P. Wittek ⁽⁴³⁾ Wittek によれば‘gazi’組織とはイスラム世界の辺境、特にビザンツ帝国との国境地帯に形成された ‘une organisation speciale de la frontière’⁽⁴⁴⁾である。アナトリアにおけるイスラム領域の前線は mantzikert 戦(一〇七二)を契機にユーフラテス川流域からアナトリア西部に進出し、そのうち十字軍の介入もあつて一進一退はあつたが、ニケーア帝国の成立(一二一〇六)の後にはアナトリア西北部の山岳地帯がイスラム世界の最前線となつていた。ところで前述のように、ルームセルジューク朝の対外政策はむしろ東方を目指してビザンツに対する積極的な攻勢を示さず、とりわけ Myriokephalon 戦(一二七六)の後には両勢力の間に休戦状態が保たれていた。それにもかかわらずビザンツとの国境地帯に

緊張が持続したのはここに辺境特有の戦闘組織である‘gazi’組織が存在したためである。

Wittek によればアナトリア征服活動の原動力は、セルジューク朝の軍隊でもなければチュルクメン遊牧民でもなく、まさにこの‘gazi’組織であつた。‘gazi’組織は九—一〇世紀ころまでにユーフラテス川上流域のイスラムとビザンツとの境界地帯で形成され、その後イスラム勢力の進出につれて西方に移動し、一三世紀にはいつてからはアナトリア西北部にあつたニケーア帝国との国境地帯に最大の‘gazi’組織が存在した。ビザンツに対する聖戦を求める宗教的情熱から、あるいはもつと現実的な動機から国境地帯に集まつた雑多な人々は、日常的な戦闘生活のなかで次第に土地への愛着をつよめ土着民と混融して、ここに辺境地域に特有の社会が形成された。国境の両側の土着民はもともと人種的基盤を同じくしたが、敵側との絶えざる接触は国境を越えた結びつきをもたらし、捕虜・投降者・改宗者などを通じて人種的・文化的交流が存続した。国境地帯には中央より遠隔の辺境として比較的自由な空氣が存し、住民は課税の免除や戦利品の自由処分などを要求して中央の統治に逆らう動きを示した。こうした環境のなかに現われた実力者たちは国境防備における軍事的指導者となるとともに、中央の権力に対する抵抗運動の中心ともなり、かくして献身的な附随者を得て自らの名誉と重要性とを自覚していた。これが‘gazi’の統領である。オスマンはこういう‘gazi’統領の一人であり、かれが擡頭したのはこうした‘gazi’組織の活動がまさに頂点に達した時期であつた。すなわちKoscedağ戦(一二四六)以後モンゴルに服したルームセルジューク朝はわずかに名目的な主権を保ち、一方ニケーア帝国のコンスタンチノープル遷都(一二六一)は、アナトリアに残存するビザンツ領土を再び帝国の辺境に変えた。こうしてアナトリア西北部の‘gazi’組織は、東方からモンゴルの圧制

をのがれて到来した様々の階層の避難民によつて増大された戦力をもつて、今や弱体化したビザンツ国境の防備を破つてビザンツ領土への侵入を開始した。この征服活動を指揮したのが「gazi」組織の統領であるオスマンであつた。

かように Wittek は「gazi」組織をもつて恒常的な戦争状態にある国境地帯に特有の社会組織と考え、「gazi」組織のイスラム的ないしチュルク的要素を重視せず、むしろビザンツ側の国境守備組織「Akritai」との相似性を指摘している。アナトリアのチュルクメン遊牧民は国境山岳地帯へ牧地を求めて移住し、ビザンツ領土への征服活動に際して「gazi たち」と行動を共にしたが、オスマンは「gazi たち」の統領であつて「遊牧首長」ではなく、オスマン家のチュルクメン Kayı 部につながる系譜は、後世の政治的意図より出た創作である、というのが Wittek の見解である。⁽⁴⁵⁾

五

Wittek 説はオスマンの遊牧的・部族的出自を無批判に承認してきた従来の研究に転機を画したものとして大きな反響を呼び、特に欧米学界ではこれを是とする傾向が見えるが、トルコ共和国の学者は F. Köprülü はじめこれに批判的な立場をとるのが一般である。Wittek 説で特に問題となる点は「gazi」組織とチュルクメン遊牧集団とを別個の集団とみなし、オスマンを「gazi」組織の統領と見てかれの部族的出自を否定したことである。前述のごとくオスマンの Kayı 出自には有力な証拠が存し、Asikpasazade Tarîhi はじめオスマン朝年代記の多くにはオスマン

が遊牧を営んだことを示唆する記載が見えるが、Ahmedi の年代記のようにオスマンの遊牧的出自に全く言及せぬものもあり、Asikpasazade Tarihî においてもオスマンのビザンツ征服活動の展開とともにオスマンに附随した「gazi たち」の実体には問題がある。この年代記に現われた「gazi たち」には、確かに Wittek のいう辺境特有の集団組織といった性格が認められる。「gazi たち」にとつてビザンツ領土への侵入は明らかに生活手段の一つであつたようで、これを指揮するオスマンが「食客を擁し」、「食卓を用意し」て「人々に食物を給し」たというのは、かような「gazi」集団の統領としてのオスマンの側面をうかがわせる。また Wittek は「gazi」集団の特徴として国境地帯の土着民との混融、さらには国境を越えての人種的・文化的交流を挙げているが、かような状況はオスマンを中心とする「gazi たち」についても認められる。オスマンは当初「近隣の不信者たちときわめて友好的な関係を持」ち(II)、特に Bilecik 市とは牧地間の季節的移動の際、荷物の保管を依頼したり、テクフル家の婚礼に祝い物を贈るような間柄であつた。Inegöl への襲撃を手始めにビザンツ領土への侵入活動が始まるが、オスマンの征服活動はビザンツ領の城市や村落に対し個別的に遂行され、ビザンツ領住民の全てを一挙に敵にまわしたのではない。Karacahisar を占領したのちオスマンは「われらの周囲を滅ぼし尽そう」という兄弟 Gündüz の提議をしりぞけて「その意見は正しくない。何故ならわれらの周辺を焼き払ったなら、このわれらの町 Karacahisar は栄えない。隣人たちとは仲良くした方がよい」(IX) と言ひ、かくてオスマンが Eskişehir に開いた市場には「周囲の不信者たちもやつてきて商売した」(IX)。

前述のようにオスマンの父祖はおそくも父 Ertugrul の代にはビザンツ領土との国境地区に到着していたはずで、

オスマンの征服活動はたとえバモンゴルのそのように長駆して来襲した遠征軍によるものではない。オスマンとビザンツ領住民との関係でもう一つ注目されるのは、ビザンツ側にオスマンと意を通じてオスマンの征服活動に協力する人々がいたことである。その代表的人物が Harmanakaya のテクフル Köse Mihal (Beardless Michael) の意である。Köse Mihal は部下とともにオスマン及び「gazi たず」の「従者 (hizmetkâr)」(X) となり、Daraki Yenicesi 遠征の際はキリスト教徒でありながら異教徒オスマンの先導を務め(X)、ビザンツ領のテクフルたちがオスマンの謀殺を企てたときは自らもテクフルの一員でありながら、いち早くオスマンにこれらの陰謀を通報している(XII)。Köse Mihal はオスマンの命によつてイスラムに改宗するがこれは一三二三年ころのこととされる⁽⁴⁷⁾。Daraki Yenicesi 遠征のときからこのときまで一一年ほどのあいだ、Köse Mihal はキリスト教徒の身でオスマンに仕え、オスマンのビザンツ征服活動に参加していたわけである。Köse Mihal の他にもオスマン側に協力した異教徒として Aratun という名が見える。Aratun はオスマンの「間諜 (martoloç)」であり、オスマンがはじめて İlegol を襲撃しようとしたとき「やつてやつて『山道のおわるところに伏兵がいる』と知らせた」人物である(III)。Köse Mihal や Aratun のような存在は、オスマンが征服活動を開始するまえからビザンツ領住民と接触していたことを示唆するように見え、オスマンが Yarlisar のテクフルの娘 Ülüler Hatun を奪つて息子オルハンの妻としたことなどもあわせて、Witteck が「gazi」集団の特質としてあげている「敵側との国境を越えた人種的・文化的交流」ということに相当するかもしれない。かようにオスマンの率いた集団と、隣接するビザンツ領住民とは、宗教的・人種的に画然と分かちがたい複雑な関係にあつたようである。このことは当時のビザンツ領住民の人種構成か

ら或る程度説明することができる。A.A. Vasiliev によるとアナトリア西北部、ビザンツのビティニア州にあたる地域の住民は様々な民族から構成され、なかでも早くからこの地に植民したスラブ系民族が国境守備組織「Akritai」の主力となつていた。⁽⁵⁰⁾ F. Köprülü によればこれら雑多な民族のあいだには「ビザンツ帝国がバルカン方面から連れてきて辺境に定着せしめたキリスト教徒または多神教信者のチュルク人」⁽⁵¹⁾もいたらしい。Mantzikert 戦におけるビザンツ軍の敗因の一つは、ビザンツ軍を構成したチュルク系軍団がセルジューク軍側に寝返つたことにあつた。オスマンがビザンツ領土に軍を進めたとき、チュルク系住民がオスマン側に加担した事実は年代記の記載からは明らかにしがたいが、全くおこりえぬことではなかつたように思われる。前述の Köse Mihal などは、あるいはチュルク系のビザンツ臣民であつたかもしれない。かれの子孫は代々オスマン朝の臣として仕え、Köse Mihal の旧領 Harmankaya は今は Mihalgazi と称されている。

いずれにせよ Asikpasazade はオスマンとビザンツ領住民との関係を、宿命的に相対立する相互に異質のものの間の関係としては描いていない。そしてオスマンがビザンツ領内への侵入を開始した動機をビザンツ領住民の裏切りと跳発とに帰せしめようとする。オスマンが İnegöl を襲撃したのは İnegöl のテクフルが牧地間の季節移動を妨害したからであり、次いで Karacahisar を征服したのはそのテクフルが İnegöl の側にくみしたからである。Bilecik との友好関係が損なわれたのは Bilecik のテクフルが他のテクフルたちとオスマンの謀殺を図つたからである。こうした記載はオスマンの侵略活動を正当化するために述作された疑いがあるが、オスマンの軍事活動は少なくとも初期の段階においては、近隣のビザンツ領住民との紛争や小競合いの範囲にとどまつていたようであ

る。しかしブルサやニケーアに対する攻略が開始されたころには、オスマンの軍事活動は明らかに新たな段階に進んでいた。それはもはや局地的な紛争の域を越え、ビザンツ勢力をアナトリアから駆逐しようとする征服活動の性格を明らかにした。かくて一三〇一年 *Koyunhisar* (*Baphaeon*) の会戦で、オスマンははじめてコンスタンチノープルより派遣されたビザンツ帝国軍と接触しこれを敗走させた。⁽²⁷⁾

Asikpasazade Tarîhi では第一四章以降オスマンの遊牧活動を示す記事が影をひそめ、代つてオスマンを中心とする「*gazi*たち」の活動への言及が多くなるが、これはオスマンのビザンツ征服活動が本格化する過程とほぼ一致する。オスマンの軍事活動を近隣のビザンツ領諸小城市と争つていた第一段階とブルサ、ニケーア (*Nikaia*) などビザンツの大都市を包囲してビザンツ帝国軍と接触するに至つた第二段階とに大別すれば、第一段階において戦力の主体をなしたのはオスマン一族を中核とする遊牧集団であつたが、第二段階には新たに附随した「*gazi*たち」の働きが大きな部分を占めるようになったと考えられる。*Asikpasazade* は「ビザンツの不信者と戦うムスリム戦士」という大きな「*gazi*」概念によつて、オスマンを中心とする集団を包括的に「*gazi*たち」と称しているが、*Köprülü* のいう狭義の「*gazi*」集団はオスマンの軍事活動の第二段階にはいつてオスマンに附随した「*gazi*たち」に限定されるべきであろう。したがつてオスマンはその晩年においては確かに *Witteke* のいうような「*gazi*」組織の統領であつたといえるが、この間にオスマンの出自した遊牧集団が解体されたわけではなく、オスマンが死ぬまで遊牧首長としての地位も維持していたらしいことはさきに見たとおりである。前述のように、*Witteke* は「*gazi*」組織を遊牧組

織とは全く別個の社会組織とみなし、チュルクメン遊牧民は「gazi」組織の征服活動に協力したと考えているが、両者の関係はかように画然と分けうるものであつたらうか。

Asikpasazade Tarihî に現われる「gazi たち」は多く馬上にあり、「夜も昼も馬の背より下りず」にビザンツ領土への攻撃を続けるのである。これをもつて「gazi たち」の遊牧的要素と即断することはできないが、当時のアナトリアの一般情勢から見てオスマンに附随した「gazi たち」の遊牧的出自は裏づけられそうである。F. Köprülü はオスマンが征服活動を展開した一三世紀後半のアナトリア西部辺境の状況について次のように述べている。⁽⁶⁸⁾

イルハン朝の支配権がアナトリアに確立された後、この地に到来したチュルク・モンゴル集団は、アナトリアのチュルク族人口を急増させた。(中略)イルハン朝が新たにアナトリア東部・中央部に定着せしめた東方チュルク系遊牧集団は、以前からそこで生活していたチュルクメン遊牧集団を軍道から遠い山岳地帯へ、アナトリア西部の辺境へと押しやり、こうして当時まだビザンツ領であつた海岸地帯へ向かうチュルクメン諸集団の新たな進出が開始された。この進出はセルジューク朝による最初のアナトリア征服の際マルマラ海及びエーゲ海沿岸に向かつて急速に拡大した侵入活動と異なり、アナトリアにおけるビザンツ軍団の消滅の結果無防備となつた広大な異民族居住地に対する軍事的占領といった性格のものではなかつた。この最初の侵入に少しおかれて西方から到来した十字軍の援助の結果、コムネノス朝はセルジューク勢力を撃退して、ビティニア、イオニア、リディアの諸州と南北の主たる海岸都市の奪回に成功した。しかし今や状況は全く別であつた。チュルクメン族はアナトリア中部の都市・村落にしばしとどまつた後、人口増加の必然的結果として新しい住地を求め、オスマン朝の始祖オスマンと「オスマン集団」の性格

小山

めて西方へ進出し、夏营地や山地から海岸へとくだつてきた。ここには（チュルクのアナトリア）侵入の初期にビザンツの支配に服してこの地にとどまつた、あるいは一三世紀にいろいろの原因によつてこの地へ遊牧してきてビザンツの臣下となつたチュルク集団が存在したし、またビザンツが、あるいはニケーア帝国がバルカンから連れてきて辺境に定着せしめたキリスト教徒もしくは多神教徒のチュルク人もいた。

アナトリアにおけるイルハン朝の支配権が弱体化したとき、ビザンツがせめてアナトリアにおける国境を防御できるほどに強力であつたなら、モンゴル侵入の結果アナトリア中部に生じた人口密集は西方へのはけ口を見出だせずに都市住民と遊牧民、または遊牧民のあいだの絶え間ない衝突の原因となり、ときには以前にも見られたように幾つかの遊牧集団が豊かな牧地を求めてビザンツ領土に定着しビザンツの臣下に入るといつた事態を生ぜしめたかもしれない。しかしビザンツはこの間に内外の様々な要因によつてアナトリアの国境を守りえぬほど弱体化していた。したがつて数世紀来敵の諸勢力を分裂させては滅ぼしてきた伝統的な外交術をもちながら、静かに決定的なベースをもつて進行するこの最後の侵入に対して何事もなしえなかつた。

以上 Köprülü の所説を長々と引用したのは一三世紀後半イルハン朝の支配が及んだアナトリアに以上のような民族移動が生じたのであれば、オスマンの活動がこれと無関係であつたとは考えられないからである。オスマンはいまにこの時期にビザンツ領土と境界を接する西部辺境において活動を開始したのである。オスマンに附随してビザンツに対する軍事活動に従事した人々の中に、イルハン朝支配下の人口移動によつて「アナトリア西部の辺境へ

押しや」られ「まだビザンツ領であつた海岸地帯へ向かつたチュルクメン集団」が含まれていたらうことは想像に難くない。「人口増加の必然的結果として新しい住地を求めて西方へ進出し、夏营地や山地から海岸へくだつてきた」チュルクメン遊牧集団は、そこでみなが新しい牧地を見出し得たとは思われない。かくて牧地を失つたチュルクメン遊牧民はビザンツ領土に対する襲撃・掠奪を主たる生活手段とするようになり、こうした武力活動がすでに父 Ertugrul の代、つまりモンゴルのアナトリア侵入の始まるまゝにビザンツとの境界に地歩を固めていたオスマン一族によつて統率され、アナトリアの後背地から絶えず補充される兵力によつてビザンツに対する本格的な征服活動に発展したのではないかと考えられる。つまりオスマンのビザンツ征服活動は、チュルクのアナトリアへの「静かに決定的なペースをもつて進行する最後の侵入」の一環として見るべきであろう。こう見てくると Asikpaşazade Tarhi に現れたオスマンに附随する「gazi たち」の中では、上述のような要因によつて西部辺境へ移動したチュルクメン遊牧集団の構成員が大きな部分を占めたように思われる。この年代記中オスマンの部下のなかで特にその名が言及される幾人かの人物、Saluk Alp, Durkut Alp, Konur Alp, Akca Koca などはそのチュルク的な名から見て、またいずれも戦闘指揮者としての働きを示していることから見て、⁶⁴ むづかに見た Samsa Çavuş などと同じく小遊牧集団の長であつた可能性もある。Köprülü はかれらの名に付された‘Alp’というチュルク称号 (ünvan) に注目して、これをかれらの遊牧的出自の一証左と考えている。⁶⁴ これらの人物は年代記中断片的に現われるに過ぎないのでそれぞれの出自は明らかにし難いが、かれらはいつも無名の「gazi たち」とともに言及され、すべてオスマンの軍事活動の第二段階にはいつてから登場している。オスマンの相次ぐ軍事的成功、とりわけブルサ、

ニケーアなどビザンツの大都市に対する攻撃活動は、オスマンに全ムスリムリチュルク族の旗手ともいふべき資格を与え、かれの勇名をしたつて、あるいはもつと現実的な打算からオスマンの麾下に集まるものが雪だるま式に増大したことが推測される。Asikpasazade Tarîhiに現われた「gaziたち」には、Witteke説に反して遊牧的要素が認められるが、かような「gaziたち」の集団はビザンツ領土に対する襲撃が恒常的な征服活動に移行した後は、軍事活動に専念する武装集団に転化していったようである。こう見てくるとオスマンは少なくともその晩年においては、Wittekeのいう「une organisation speciale de la frontière」としての「gazi」集団の統率者という性格をつめていたと言ひ得るであらう。

結 び に

オスマン朝の始祖オスマンの出自については、大きく分けて二つの考え方がある。オスマンの部族的出自を肯定し、かれの遊牧首長的性格を認める見地と、オスマンの遊牧的・部族的出自を重視せず、むしろオスマン擡頭の要因を一三世紀後半〜一四世紀初頭におけるアナトリアの歴史的状況のなかに見出だそうとする立場とである。近代におけるオスマン・トルコ史研究の開拓者 Hammer Purgstallは、主として Nesri Tarîhiにもとづき、オスマンの父祖がモンゴルの西進に圧迫されてホラサーンから長駟アナトリアに到来したという伝承を史実と認め、Lane Poole, Creasy など今世紀初頭に至るオスマン朝史研究者の多くはこれに倣っている。しかし本論中瞥見したようにオスマン朝の「父祖移住伝承」は後世の史家によつて述作された疑いが濃く、強いてこれに史実の反映を求める

ならそれはオスマン朝の父祖が「東方からアナトリアに到来」し、「オスマンの父 Ertugrul のときまでにアナトリア西北隅の地に居ついた」、ということに尽きるであろう。「父祖移住伝承」が人を誤らせるもう一つの要素は、あたかも「オスマン族」とでもいうべき部族集団が、オスマンの父祖の代から存在したかのごとく伝えている点である。オスマンを中心とする集団を「オスマン族」と呼ぶなら、それはオスマンの出現をもつて初めて形成された政治的な集団であつて *ethnical* な統一体ではないというのが今日のオスマン朝史研究者のあいだの常識である。しかしオスマンの父祖のアナトリア移住をモンゴルの西征に結びつける伝承は、オスマン国家の草創を語るにふさわしい壮大な構想をもつためか一般には今も流布しており、研究者のあいだでも Z. V. Togan のようにこの伝承に固執する人がある⁽⁵⁵⁾。

本論ではオスマンがチュルクメンの Kayi 部に属したことを承認する立場から、オスマンの父祖はすでに一一世紀中にアナトリアに到来したものとみ、モンゴルの西征はオスマンのビザンツ征服活動とそれに伴うオスマン集団形成の過程において大きな要因となつたと考えた。オスマンの Kayi 出自については P. Wittek はこれを疑問視し、チュルクメン遊牧集団とは別個に ‘gazi’ 集団を想定してオスマン = gazi 説を提起した。F. Köprülü は Wittek 説を批判してオスマンの Kayi 出自を確認したが、一方では「オスマン一族が Kayi に属したことは事態の歴史的発展の上になかなる形での影響も及ぼさなかつた。(中略)。オスマン一族の役割は自らの中から一人の国家創設者を出し、そのはじめの支柱をつくるというむしろ偶然的なものであつた⁽⁵⁶⁾」と述べている。

私は Asikpasazade Tarhi の記載の分析を通じてオスマンのビザンツ領土に対する征服活動を二段階に分けて

みた。第一段階の近隣の諸小城市に対する襲撃に際してオスマンの用いた兵力はおそらく *Kayi* に属した小遊牧集団にすぎなかったが、第二段階に進んでブルサ、ニケーアなどビザンツの大城市に対する包囲態勢が開始され征服活動が本格化すると、オスマンのもとは *Witteck* のいわゆる「*gazi* たち」が附随して、オスマンを中心とする辺境特有の武装集団「*gazi*」集団が形成された。この「*gazi*」集団は *Witteck* の説くほど部族組織から遠いものではなく、むしろその主力はチュルクメン遊牧民から構成されたと考えられる。しかしオスマンを中心とする集団をもし「オスマン族」と名づけるなら、それは征服活動の拡大とともに部族的統一から一つの政治的統一へ発展していたと見るべきで、オスマンの名を冠する「オスマン族」はセルジュク朝の成立以来チュルクメン諸部族のあいだで形成された幾多の政治的統一の一つであつたと言えよう。

以上のような結論を私は主として *Asikpasazade Tarîhi* の記載を分析することによつて引き出し得たと思う。*Asikpasazade Tarîhi* の史料性格については本論では深く立入らなかつたが、この年代記がオスマン国家の形成過程を追究する手がかりとして最も有力な史料の一つであることは疑いない。著述年代からみれば *Ahmedi, Sükrullah, Enveri* などの年代記は *Asikpasazade Tarîhi* より半世紀または数十年さかのぼるが、これらはいずれもいわゆる「綜合史」(universal history) の一部をなすものできわめて簡略な叙述であり、いずれの筆者もオスマン朝の宮廷人であつたため美辭麗句の連なる定型的な王朝史となつてゐる。これに対し *Asikpasazade Tarîhi* は *V.L. Ménage* によれば「coherent な全体を成し、オスマン朝の歴史のみを対象とし、筆者の個性が明確に反映されている」点でオスマン朝最古の歴史叙述と目されている⁽⁵⁷⁾。本書はアナトリアのチュルク口語で書かれた「きわめ

て民衆的な歴史書」であつて「声を出して読まれるように構成されたことは明らか」⁽⁵⁸⁾である。大部分が直接話法で書かれ、多くの章の末尾に質疑(sual)と応答(cevab)が付されているのは「聞き手の一人が質問したり異議を申しはさんだりすると、語り手が話を進めるまえにそれを説明しているやまを想像させ」⁽⁵⁹⁾て。Asikpasazade Tarihîの特徴の一つは筆者が史料の出所を明らかにしている点であるが、本書の序文によると、Asikpasazadeはオスマン朝第二代君主オルハンのイマームを務めたという Ishâk Fakih の子の Yahşi Fakih なる人物に伝わつた「Bayezid 一世の代に至る年代記」を主たる原資料としたらしい。⁽⁶⁰⁾本文にはいつでもオスマンの父 Ertuğrul の事蹟を物語つた後で「Ertuğrul Gazî がルームにやつてきた次第については幾つもの伝えがあるが、最も確かなのは筆者が引用したものである」⁽⁶¹⁾と述べるなど随所において筆者の史料編述者としての立場を明らかにしている。Yahşi Fakih なる人物の家に伝えられたというオスマン家の年代記がいかなる書であつたかは未だ解明されていないが、Asikpasazade Tarihî が今は見ることのできないオスマン朝の古い史料を原典としたことは疑いない。

本書の序文の中で「貧しき Dervîş」「白髪の Dervîş」と自称する Asikpasazade はその生涯を民衆のあいだですごし、本書もまた「民衆に読ませるためか、あるいは少なくともペルシア語を解さぬ人々を対象として書かれた」と見られ、オスマン朝における「散文による歴史叙述の最初の試み」と目されている。⁽⁶¹⁾Asikpasazade と前後してオスマン朝史をもつた Sükrullah や Karamanî はオスマン朝宮廷における枢要の地位にあり、あるいはペルシア語あるいはアラビア語をもつて王朝の歴史を叙述した。これらは修辭にみちた表現で王家の栄光を称えたもので、とりわけ始祖オスマンの像は極端に巨大化されている。これに反し Asikpasazade Tarihî に現われたオス

マン像は本論中で見たように、王者などと呼ばれるには遠い辺境の一頭目の姿で現われている。その故か王朝の讚美をこととする後世のオスマン朝史家は *Aşikpaşazade Tarihî* の素朴な叙述形式を「ペルシア文化の光りの及ばなかつた時代の粗野な産物」⁽⁶²⁾ としてしりぞけた。しかしオスマンの実体は「偉大なるスルタン」(*Karamanî*) などというより、*Aşikpaşazade* の描いたような素朴なオスマン像に近かつたように思われる。オスマンの生涯の活動舞台はアナトリア西北隅サカリア川からマルマラ海にいたる地域、今日の Bilecik, Bursa 両県 (*vilâyet*) の併せて 15,000 km² ほどの範囲をほとんど越えておらず、かれの征服活動が比較的小規模なものであつたことに留意した³。*Aşikpaşazade* は *Aşikpaşazade Tarihî* の序文の中で、「私はかれらの系譜 (*neseb ve nesil*) を語らう。どこからこの高貴な王家が興つたかをかれらが知るところにもとづいてあなた方に知らせよう。かれらの源、かれらの根は何処にあつたか。この信仰戰士たちの素性を私はあなた方に説明しよう」⁽⁶³⁾ と述べて、オスマン家の出自を明らかにすることを本書の著述目的の第一に数えている。私はこの *Aşikpaşazade* の所伝にかなりの歴史事実が含まれているものと考え、*Aşikpaşazade Tarihî* の記載を主たる手がかりにオスマン朝の始祖オスマンと「オスマン集団」について考察してみた。*Aşikpaşazade Tarihî* の史料性格についてはより厳密な史料批判を要しようが、本論ではそこまで論を進める余裕がなかつた。この課題の追究は別の機会に譲りたいと思う。(東京大学大学院学生)

注

いさへ。

- (1) オスマンの生存年代については定説はないが、本稿では I. H. Danişmend, *İskanî Osmanlı Tarihî Kronolojisi*, cilt 1, İstanbul, 1947 によつて一三五八一—一三三六年とす。
- (2) H. İnalcık, *The rise of Ottoman historiography*, *Analecta Orientalia*, Leiden 1954, p. 152.
- (3) 本稿では Ç. N. Atsız 編 *Osmanlı Tarihleri*, 1,

- Istanbul, 1949 (以下 Osmanlı Tarihleri と略称する) に収録されたラテン字転写版を使用する。この史料集には *Asîkpaşazade Tarihî* の他 *Ahmedi*, *Sükrullah*, *Karamanî*, *Bayatî* などのオスマン朝年代記も収められている。
- (4) 版本および章 (bâb) 数には出入りがある。これは Ç.N. Atsız 版による。
- (5) *Asîkpaşa* は Kırşehir 出身のデトウヴァーニヤで教訓的で神秘主義的色彩の濃く詩篇 'Garîbnâme' を著わした。
- (6) *Osmanlı Tarihleri*, s. 91.
- (7) 本稿では *Asîkpaşazade Tarihî* の第一章から第XXXIX章まで (*Osmanlı Tarihleri*, ss. 91-115)。
- (8) 現存する最古のオスマン朝年代記は一四一〇年以前に書かれたと推定される *Ahmedi* の '*Dastân-ı Tevârîh-i Melûk-ı Âl-i Osmañ*, (オスマン朝歴代君主の史記) である。これはチャルク語の韻文で '*İskendername*' という大部の詩篇の一部を成している。Ahmedi は一三世紀アナトリアの代表的チャルク詩人ではじめオスマン領に隣接するゲルミヤン侯国 (*Germiyan Begliği*) に仕えたが、のちオスマン朝の *Bayazî* 一世の息子 *Suleyman Çelebi* の庇護で浴びて本書をこの土地で執筆している。
- (9) *Enveri* といふのは *Mehmet* 二世の大宰相 *Mahmud Paşa* に附随して多くの戦役に従事したといふ '*Düstûrnâme*'

オスマン朝の始祖オスマンと「オスマン集団」の性格

と題する「綜合史」を一四六五年に完成したことその他はわからない。 '*Düstûrnâme*' は一二の章に分かれ、第一八章が *Mehmet* 二世の即位に至るオスマン朝の歴史である。*Enveri* は本書を一カ月で書上げたたと述べており、おそらく既成のテキストを編述したものらしく、その叙述も簡略である。

- (10) *Karamanî* は *Konya* の出身で *Mehmet* 二世の大宰相 (*veziriazam*) をいふ。一四八二年 *Mehmet* 二世の死の翌日首都ではつた暴動の際に暗殺された。一四八〇年頃に書かれた '*Tevârîh us-Selâh ul-'Osmaniyye*' はオスマン朝の専史といふ *Asîkpaşazade Tarihî* と次いで古くものであるがアラブ語で書かれたこと簡略な内容である。

- (11) このマクフ寄進状といふのは「トルコ歴史協会」(*Türk Tarih Kurumu*) 刊 '*Belleken*' (cilt 27, sayı 107) の書評のなかでその概略を説明してつた(東洋学報第四七巻第一号一三四頁)。

- (12) *İ.H. Uzunçarşılı*, *Osmanlı tarihi*, 1. cilt, 2. baskı, Ankara, 1961, s. 102.

- (13) *F. Köprülü*, *Osmanlı Devletinin kuruluşu*, Ankara, 1959, ss. 30-32 (以下本書を *Köprülü*, と略称する)。

- (14) *Mehmed Nefî*, *Kirâb-ı Cihan-nümâ*. *Nefî tarihi*,

小川

Ankara, 1949, cilt 1. (Zild Nesri tarihi と略称する) s. 65.

(51) Türkiye Ansiklopedisi, Ankara, 1956, cilt V, s. 159.

(91) Nesri Tarih, s. 71.

(17) F. Köprülü, İslâm medeniyet tarihi, Ankara, 1963.

(Zild Köprülü と略称する) s. 341.

(18) テクフル (teklür,) という語は、オスマン語ではキリスト教世界の統治者——小領主から皇帝に至る——に対する称呼として用いられる。Asikpasazade tarihi に於てはアナトリア西北部のビザンツ領諸城市に拠る 'Burgheer' を指すもののようであるが、かれらの実体は問題であるので本稿ではそのまま「テクフル」と記することにする。

(cf. F. Kreutel, Vom Hirtenzelt zur Hohen Pforte, Graz, 1959, S. 329.)

(61) Sükrullah は Murad II 世 (一四二一—一五一在位) に仕えて重要な国務に参画し特に外交使節として度々用いられた。一四三七年には Karaman 侯国へ、一四四九年には Karakoyunlu 朝へ使節として。一四五六半 Mehmet I 世のとき隠棲中のベルサビ 'Behittetvârin' を起筆し、一四五九年に完成して大宰相 Mahmud Paşa に献呈した。これはいわゆる「綜合史」でオスマン朝の歴史はその世界の部で先行するムスリム諸王朝の歴史に続いて叙述され

てゐる。

(20) オグズ伝説は現在二つのテクストに最もよくその原型を伝えている。一つは「集史」の第一巻「部族篇」に収録されたもの、もう一つはウィグル文字で書かれた「オグズナーメ (Öğüzname)」である。両テクストにあらわれたオグズ伝説は早くから研究の対象になつてきたが、いまだに未解明の問題が少なくない。しかしオグズ伝説がチュルクメンの諸部族のあいだに生まれた族祖伝承の一つであること、「集史」の編纂されたころ即ち一四世紀初頭には既にその原型が成立していたこと(「オグズナーメ」の成立年代も Pelliot 説では一二〇〇年前後とみられる)、この伝説が特にモンゴル侵入後のチュルク世界において大いに普及したことはほぼ定説となつてゐる。

(21) V. Minorsky はこれを 'Turkmen' という部族呼称は一〇世紀初頭のムスリム史料にはじめて現われ、その後実際の用例において 'Turkmen' は 'ghuz (oğuz)' のシノニムとなつてゐる。(V. Minorsky tr., Sharaf al-zaman Tahir Marvazi, London, 1942, p. 94.)

(22) M.H. Yinanç, Türkiye tarihi——Selçuklular devri I, Anadolu'nun fethi, İstanbul, 1944, ss. 168—176.

(23) イブン・バットゥータ・前嶋信次訳、三大陸周遊記、角川文庫、一三八頁。

